

『世論調査で社会が読めるか』

平松貞実著

新曜社



定価 2,200円+税

氾濫する今日、必要不可欠となる。著者は、この本は「社会を見る目をみがこう」という思いで書いたといふ。

著者によると、社会調査の専門家には二派があるという。一つは調査の仕方を厳格にして得られた結果は厳然たる事実として受け止められる。役立つか役立たないかといえば、役立つという実感がある。

第二は、「調査は信用できない」といレッテルを貼ってしまうと、元も子も失くしてしまうということを恐れるからである。調査は経費がかかりものだけに、調査不信が広がると調査の予算が取りにくくなったり、調査結果を用いての発言がしにくくなったりする恐れがある。そこで誤差についてはあまり扱わないことになる。

第三は、誤差のなかで「サンプリング誤差」が重視されたために、その以外の誤差がなぞりにされてきたということがある。逆に言えば、サンプリング誤差さえクリアしていれば調査は信頼できるという印象は賛成? それとも反対? (5) 内閣支持率って何? (6) 支持政党はあるの? ないの? (7) 自由に答えさせることを理解することが、調査情報の各事例の末尾には著者からの一言がある。たとえば、世論は賛成? そ

れとも反対? では、『世論調査で賛成と出るか反対と出るかは回答形式だいである』とのコメントがついている。

第三部「世論調査で社会を見る」では、(1)態度はどのように測定するか、(2)イメージとは何か、(3)「中流」調査のルーツ、(4)日本の社会の姿は? といった問題を扱っている。終章「世論調査を正しく見る方法」では、社会調査の種類・分類、研究の過程と調査の分類、世論調査の特徴、二種類の世論調査、社会調査の結果の伝わり方、世論調査の見方等を体系的に述べたあと、複眼世論調査を提案している。

その中身は本書で学習して欲しいが、著者の「大切なことは、われわれが見たいもの、見るべきものは世界であって、世論調査の結果ではなく」との基本認識は十分噛みしめたるものである。

そこで、どのような誤差が、どのよう時に、どの程度あるかということを理解することが、調査情報の各事例の末尾には著者からの一言がある。たとえば、世論は賛成? そ

たらずと言えども遠からず」という実感を与えてきているという現実である。

第一は世論調査・社会調査は「当

社会の実態を正確に捉えるうえで、「社会調査」が注目されるが、社会調査には世論調査、マーケティング・リサーチなどさまざまなものが含まれる。

この本は、副題「社会調査入門」とあるが、世論調査中心である。著者はこの本のねらいについて、概略次のように述べている。

世論調査・社会調査には、調査対象による調査結果の違い、サンプリング誤差、回収の偏りによる誤差、調査員による誤差、回答者による誤差、訴願心による誤差、調査時期による誤差、調査票(質問・回答)による誤差等々いろいろな誤差があるが、それにもかかわらず、あまりそれが問題にならないのには、それなりの理由がある。

第一は世論調査・社会調査は「当

たらずと言えども遠からず」という実感を与えてきているという現実である。

第一は世論調査・社会調査は「当

たらずと言えども遠からず」という実感を与えてきているという現実である。